

評

## こころの通訳者たち What a Wonderful World



◇シネマ・チュプキ・タバタで先行公開中。22日から順次各地で

## 見えぬ人に手話伝える挑戦

異なる障害のある相手との対話は成り立つのか。例えば全盲者とする者はどう対話するのか。これは、石田智哉監督が初長編「へんしんっ!」で投げかけた一つの問い。そこにまた別の方法で取り組んだ映画がある。映画館シネマ・チュプキ・タバタが製作した「こころの通訳者たち」。

始まりは、3人の舞台手話通訳者が出演した舞台作品。3人は耳の聞こえない人に台詞や情景を伝えるため、俳優と一緒に稽古し、通訳者兼出演者として舞台にあがる。その舞台裏を記録したドキュメンタリーがまず作られ、続いて目の見えない人にも届けたいと音

声ガイドの制作が始まる。この音声ガイド作りの過程を記録したのが本作だ。

台詞だけでなく手話通訳の内容まで音声で説明し、さらに人の動作や場面の描写を行うのは想像以上に難しい。数人の全盲者に助言をもらい、ろう者や手話通訳者らにも意見を求めるうち、各々の求めるものや譲れないものが噴出し、作業は一時暗礁に乗り上げる。

手話を音声にするなど本来に可能なのか。そこまでしてガイドを作るべきなのか。次々と疑問が浮かぶなか、チュプキ代表の平塚千穂子氏の粘り強さが人々を動かし、つまた一つと解決法が提案される。

絶え間ない対話から見えてくるのは、現実の多様なあり方と異なる身体で生きる人々への想像力。手話言語の本質を知り目の見えぬ人たちの映画鑑賞法を学ぶことで、音声ガイドやバリアフリー字幕が必要な理由も明確になっていく。

無謀と思われた計画は無事大団円を迎える。そして私たちは世界がいかに重層的にできているかを知る。

(月永理絵・映画ライター)